
幽霊と結婚！？番外編！！

しんや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊と結婚！？番外編！！

【Nコード】

N6800D

【作者名】

しんや

【あらすじ】

幽霊と結婚！？の番外編です。オザワ先生とのコラボ作品です。

オザワ先生の小説も読むとより楽しめると思います。 <http://id20.fm-p.jp/39/0222004031/>

（前書き）

オザワ先生ご協力ほんとにありがとうございます！

「しゅん！舞花ちゃん！」

「なんですかあ？」

「なんか用か？」

「突然で悪いんだけどこの書類を飛鳥大学の理事長のところに届けてくれないかな？」

ほんと突然だな。

「飛鳥大学って日本一広くて頭がいい大学で有名な？」

「そうそう！」

「っでなんだこの書類は？」

「んふふふふ」秘密」

どたま力チ割るぞクソ親父。

「つつつよりなんで親父がそんなとこの理事長と知り合いなんだよ？」

「昔色々ね」

うわぁ………すげえやな予感………

「とにかく慎くん行こうよ」

「なんでそんな乗り気なんだよ？」

「デートだから？」

「なんで俺に聞いてんの！？」

「そんなこんなで飛鳥大学へ俺達は行くことになった。」

「うわあ〜」

「でっか」

もうでかすぎてそんな言葉しか出ないくらいにでかかった。

「えっと理事長室は……？」

「本部棟の最上階って書いてあっけど。」

「あれかなあ？」

舞花指先にはどっかの国の教会のような建物があった。

「ここ日本だよな？」

「そのはずだよ。」

「とりあえず行くか。」

「うん」

俺達はなんとか理事長室についた。歩きすぎて足いてえよ。

「君たちが生田君のお使いの方たちかな？そこに座って少し待っててください。」

そついいながら理事長は椅子に座り俺達にも座るように言った。

なんつつか……すげえいい人っぽい優しそうで少しも偉そうにしてねえよ。どっかのクソ親父にも見習って欲しいわ。

「これが預かった書類です。」

「ありがとう。……ふうむ」

「じゃあ俺達はこれで。」

「まだ紅茶飲み終わってないよぉ」

アホか。

「ちょっと待ちなさい。」

「?……どうしたんですか？」

「もう少し待ってくれないかな？」

「なんでですか？」

「この書類の返事を作るから後でまた来てほしい。その間はそうだね……高校の方見学してみないかね？」

「でも今日は平日だから普通に授業やってるんじゃないですか？」

俺達は学校が創立記念日だから休みとゆうことできてるが今日は火曜日で普通の学校は授業がある。

「いや今から行けば授業がおわるころには着くから大丈夫だよ。」

「だって慎くん、行こうよ。」

「まあ滅多にない機会だし行ってみるか。」

「決まりだね。学校の方には連絡しておくから帰りにこっちに寄ってくれればいいよ。」

「分かりました。じゃあまたあとで来ます。」

そう言って理事長室を後にした。

「すみません。高校の見学来たものですけど。」

「ああ、理事長から聞いてるよ。自由にまわって帰る時にまた教えてくれればいいから。」

「分かりました。」

「とりあえずどこから壊そうか？」

ちよつとまていー！！

「なにをどうしたらその発想に行くのかな？」

「慎くんのえっち」

会話ぐらいちゃんとしやがれ！

「とりあえずもの壊すなよ!？」

ズドドドド!!

「はあい」

「まてえ〜!」

ズドドドド!!

なんだこの音？

「慎くん!あれっ!」

「あれ?……うわっ!なんだあれ!？」

舞花の指先50mほど先には男に追われる男がいた。しかもこっち
きてるし!

「ソーリー!!!」

ソーリー?なにを謝ってた?

「その君！俺を奇跡的なコンビネーションで逃がしたまえ！」

はい？

「そこのおまえええ！そいつを捕まえろおお！」

えっ？なにどうゆうこと？

どーーん！！

「いてて…」

「よくやった！」

なにがだよ？

起き上がろうとすると誰かが上に乗ってることに気付いた。

「いてえ」

自分からぶつかってきたのは誰だよ。

「捕まえたぞソーリ！」

ソーリ？ああ、この人のことが。

「やつ捕まってるない。」

そう言っただけでまた走った……と思った俺の後ろにいた奴に捕まってしまった。

「オカマ!？」

「捕まえたわよぉーソーリくん♪」

「…………っ!」

なんなんだろこの状況?イケメン3人で鬼ごっこ?とりあえずこの場は去ったほうがいいな。

「ところでおまえは誰だ？」

げっ!絡まれた!

「高校の見学に来た通りすがりのものですか?」

「あたしは舞花でええす!」

「そうか。とりあえずそこでまってる。お礼をしてやる。」

お礼はしてやるって言い方しませんよ?

「はなせええ!」

「だあめ♪はなしたらソーリくん逃げるでしょ?」

この人は女なのか?それとも男か?なんかすげえ綺麗な顔してんなあ。

「よし!生徒会室行くぞ!おまえらもついてこい!」

はっ？

「はあい」

少しは考えるアホ女。

そのまま俺達は強制的に生徒会室に連れて行かれた。

「すごいよ！慎くん！」

「確かに…」

生徒会室に入ると高そうなソファーなどがありそこに一人女の人が座っていた。

「あつ、ソーリさん捕まったんですか？」

「うるせ」

「っでそっちの人達は誰ですか？」

「北朝鮮のスパイ」

うん。明らかに違うよね。

「そうですか。」

納得するの！？

「よしおまえら自己紹介しろ！」

偉そうにしゃがって。ホクロちぎるぞ！

「あたしは田辺舞花でえす」

「生田慎です。」

「あたしは柊空です。よろしくね」

これはソファーに座っていた女の人。そこらのモデルより断然綺麗だな。

「阿部光輝だ。よろしくな。」

これは一番偉そうなやつ。態度と身長がでかくてム力つくな。

「姉齒よ」ネイサンって読んでね」

これは男か女かわかんないひと男らしいんだけどなんか女みたいだ。

「ウォルト デイズニーです。」

「「「うそつけ」」」

「この人は伊藤 博文ってゆうの。初代内閣総理大臣と同じ名前だからソーリって読んであげて。」

「分かりましたあ」クーさん達生徒会の人達なんですかあ？」

「そうよ。不本意だけどね。」

「あたしは違うわ。」

「俺が生徒会長だ。」

一番偉そうだもんな。

「ソーリさんがしゃべってないんですけどいいんですか？」

「ああ、拗ねてるだけです。」

「拗ねてねえ。」

そういいながらプイツとしてしまった。なんか可愛かったな。

そんな感じで1時間ほど話しソーリさんも馴れてきたのか徐々に不思議な発言が多くなってきた。

「生の身長はいくつだい？」

ちなみに生は俺のことだ。ソーリさんがいきなりつけたあだ名だが抵抗は無理と判断した俺は素直に受け入れた。

「168ですけど？」

「じゃあ俺と同じ170だね。」

人の話し聞いてますか？つつつかあんた俺より小さいでしょ？

「ソーリくん嘘はダメよ。」

「いいや、俺は164・5だから四捨五入165になってさらに四捨五入して170だ。」

アホか。

「ソーリさんそれを言ったら全国に一体何人170センチの人がいると思っただですか。」

「にやははは！ヒラリーナイスつつこみ！」

この人は酔ってるのか？ってか笑い方が独特だなおい。

「そういえば、ソーリさんはなんで追われてたんですか？」

「三角関係ですかあ？」

空気読みやがればかやろう！

「そうだよ。」

えー！！？

「マジですか！？」

「うそ」

「はっ？」

「にやははは！」

たちわりい嘘つくなよ！

「あながち間違いでもないんだよ」

「へっ？」

「ソーリさんがジローって子とクレープ屋にいつてネイサン達との約束破ったから追いかけてたんだよ。」

「そうよ！あの時あたし達5時間もソーリくん待ったのよ！」

ソーリさんは鬼か！？

「そうだ！それ相応の罰は受けてもらうぞ！」

「約束なんかしてないし。」

「人の話し聞いてなかったただけだろ！？」「なんつうか……アホばっかじゃん！」

「まあまあ。ソーリさんが身体を捧げればいいじゃないですか。」

クーさんさらつとすごいことゆうなあ。

「やだ」

「じゃあ今夜は3人でお泊まりね、色々教えてあげる。」

いろんな意味でこええよ。

「ホクロン家ならいいよ。」

「マリアならいないぞ」

「じゃあ行かない。」

「「うおい!!」」

すげえなあ。自由すぎだぜソーリさん。ちなみにマリアつつつのホクロさんの妹らしい。ってかそろそろ時間だな。

「じゃあ俺達そろそろ帰ります。」

「じゃあ。送ってくよ。」

「いいんですか?」

「いいよ。これだけ広いと迷うでしょ?」

「じゃあお言葉に甘えてお願いします。」

「慎くんは方向音痴だもんね」

ぶっころすぞ。

「俺もヒラリーと行く。」

「逃げる気か?ソーリ?」

「大丈夫。絶対逃がさないから。」

笑いながら怖いこと言ってるよ。クーさん相当ドSだな。

「じゃあ行こうか。」

「はい。」

俺達は正面玄関まで連れていってもらい帰ろうとすると前から羊のような少年がきた。

「ソーリくんだあー！」

「おう。」

「今からクレープ食べに行かない？」

「行く。」

簡単に約束破ったよ！

「クーちゃんはあ？」

「あたしはアンチ甘党だからいい」

「えー」

「うっ！」

「ヒラリーも来い。」

「はい……」

「生達も来い。」

なんで!?

「行きまあす♪」

勝手に決めるな。

「君達はだれえ?」

「あたしは田辺舞花でえす♪」

「生田慎です。」

「僕は佐伯滋郎だお!よろしくね!」

うわっ!すっげえかわいいなんか撫でたくなるな。

「かわいいですねえ♪」

「へへっ!」

ホントに撫でるな!

「じゃあ慎くんたちも行こおか!」

「はあい♪」

まあいつか。

結局このあと1時間以上HAPPY TIMEとゆうクレープ屋で話していた。

「甘いものなんて嫌いだ。」とゆうクーさんの叫びはとりあえず無視しておいた。

俺達はそこでみんなと別れ再び理事長室に向かった。

「ああ。来たかね。とりあえずこれが書類だよ。家に帰ったらよく読んでいてね」

「俺達がですか？」

「そうだが…生田さんからはなにもきいていないのかね」

「なにも聞いてませんけど？」

「じゃあ封筒の中身を見てみなさい。」

中をみるとそこには『生田慎、田辺舞花を本校の入学を許可する』と書いてあった。

「えっ!？」

「しっ慎くん!これって!？」

「ああちなみにこれは10年間有効だからこの紙を事務員に渡せばいいから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6800d/>

幽霊と結婚！？番外編！！

2010年10月15日21時36分発行